



TITLE:

# 韓国との学術交流: 国際教育研究フロンティアB 2011年度「韓国教育史特別講義: 未完の『近代教育』」

AUTHOR(S):

奥村, 好美

---

CITATION:

奥村, 好美. 韓国との学術交流: 国際教育研究フロンティアB 2011年度「韓国教育史特別講義: 未完の『近代教育』」. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして2012, 活動報告書(2007-2011年度): 124-124

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179686>

RIGHT:

## 国際教育フロンティア 2011年度 「韓国教育史特別講義：未完の『近代教育』」

### 1. 概要

2011年7月29日（金）・30日（土）に、韓国ソウル大学の禹龍済（ウ・ヨンチュ）先生による韓国教育史についての集中講義が総合研究2号館の演習室にて行われた。集中講義には、約20名の学生が参加し、熱心に耳を傾けていた。



▶授業される禹龍済先生

### 2. 集中講義の内容

韓国教育史は、「朝鮮王朝社会（1392～1905）の教育」、「植民地期（1905～1945）の教育」、「解放（戦後）と分断以後の教育」という大きく3つの時期に区分されており、その時期区分に沿って講義は構成されていた。

まず最初に、写真を見ながら前近代～現在までの学校の構成や配置についての紹介があった。その上で、現代韓国の特徴などが概観され、韓国教育史についての内容へ入った。

朝鮮においては、4世紀末～8世紀に中国から儒教式学校が受容された。儒教式学校は高麗時代（9世紀～14世紀）に試行期を迎えた後、朝鮮時代（15世紀～19世紀）に定着していった。したがって、「朝鮮王朝社会の教育」においては、儒教式教育に基づく国家が追求された。具体的には、15世紀、国家による教育である官学が行われ、科举制度という試験制度が実施された。ハングルが創成されたのはこの時期であった（1446年）。続く16～17世紀には、士林という、地方の儒学知識人社会が成立した。書院を中心に発達した。この時期に、朱子学の理解が完成されたと考えられていた。

朝鮮後期（18～19世紀）には、一般民衆の教育機関の増加が起り、支配層の文化も民衆に共有された。郷吏層という支配層の末端の拡大もおきた。なお、科举制度が乱れたとされるのも、この朝鮮後期のことである。

朝鮮時代の末期は開港期（1876～1905）と呼ばれる。日本による朝鮮の開国や、西洋の学問やキリスト教の

流入などがおきた。同時に、朱子学を相対化しようとする動きが存在した。そうした中、1894年に甲午教育改革が行われた。これにより、初等教育中心の学制、話し言葉であったハングルの書き言葉としての使用、女性教育などが行われるようになった。

「植民地期の教育」については、まず最近の研究結果が紹介され、その上で当時の教育について講義が行われた。当時、教育機会が普及し、植民地期末期には約半数の子どもが学校へ通うようになった。授業は日本語で行われた。この時期の遺産として、①初等教育中心の“国家”教育体制の定着、②学校組織、教育課程の構成などの制度的特質、③意識、行為様式、人間関係など行為水準での特質があげられた。

続いて「解放（戦後）と分断以後の教育」が扱われた。朝鮮は解放後、南北に分断され朝鮮戦争を経験する。当時の韓国の教育制度はアメリカからの影響を受けた。北朝鮮は、1940年代後半から社会主義国家を建設し、当時一般普通教育が拡大した。当初北朝鮮はとても優れていた。60年代頃から唯一体制が構築された。教育においては、専門技術教育が、やがて主体思想と政治思想教育が強化されるようになった。一方、韓国では高度経済成長がおこるとともに教育が普及していった。その一方で、公教育の私教育化がおこり、受益者の負担が増した。軍事独裁の時代もあったものの、80年代に教育において民主化運動が行われた。

最後にテーマ「未完の『近代教育』」に関して、今後の課題が話されて講義はしめくくられた。なお、講義においては、以上の内容に関して適宜質問の時間がとられていた。参加した学生からは様々な質問が寄せられており、有意義な集中講義となったことが窺える。



▶禹龍済先生と受講生

（文責：奥村 好美）